イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ

フランコ・ベルギー派のスターとして華やかな演奏活動を行なっていたイザイが第一次世界大戦後、米国から帰国し、ソリストから教育者、作曲家に転じようとしていた時期に書かれた作品。バッハの《無伴奏》からの影響を隠そうとせず、そこにロマン的な香りと、現代的なテクニックを加えている。各ソナタが同時代の名だたるヴァイオリニストに献呈されており、作曲者の自負と作品に込められた狙いをうかがい知ることができる。

第 1 番（ト短調）は全 4 楽章からなり、ヨーゼフ・シゲティに献呈。イザイが本作品集の創作を思い立ったそもそもが、シゲティのバッハ演奏を耳にしたことであったため、全編にわたり対位法的書法が透徹されている。なかでもフガートの第 2 楽章は六重音（！）により、アレグロの第 4 楽章は頻出する重音奏法により、難曲として知られる。

第 2 番（イ短調）は全 4 楽章で、ジャック・ティボーに献呈。「Obsession 妄執／強迫観念」の副題をもつ第 1 楽章からグレゴリオ聖歌の「怒りの日」の主題が登場し、すべての楽章でこのテーマが現れる。とくに第 4 楽章の重音とスル・ポンティチェロの効果は抜群。

「バラード」の題名を持つ第 3 番（ニ短調）は単一楽章でまとめられ、演奏機会も多い。献呈者はジョルジェ・エネスク。ルーマニアの民族舞踊を意識したかのようなロンド形式のラプソディが印象的。

第 4 番（ホ短調）は、フリッツ・クライスラーに献呈。アルマンド、サラバンド、フィナーレの 3 楽章からなり、サラバンド楽章のオステナート書法には、バッハの「パルティータ」へのオマージュという側面がつよく感じられる。

第 5 番（ト長調）は、同じベルギー人のマチュー・クリックボームに献呈。ドビュッシー風の音づくり、擬古的な五度や四度の多用、さらには「曙光」「田舎の踊り」という楽章表記などから、全 6 曲中、もっとも温和で素朴な色合いを持つ。

第 6 番（ホ長調）は第 3 番同様、単一楽章作品で、スペイン人のマヌエル・キロガに献呈。この最後のソナタで作風は一気に現代化し、ヴィルトゥオーソが開花する。キロガに敬意を表した（そして、サラサーテを想わせる）中間部のハバネラが魅力的。